長野大学紀要　第13巻第2・3号合併号　158-168頁　1991

『新生』から『夜明け前』へ（7）

De "Shinsei" à "Yoakemahe" (7)
—sur les oeuvres de SHIMAZAKI Touson—

佐々木　　　逕
SASAKI Thoru

Ⅳ-2-（1）

『夜明け前』は有名な書き出し、「木曾路はすべて山の中である。」で語りが始まる。あたかも映画のカメラが天空からとらえる一筋の道を映し出しなぞっているようだ。さらにその街道、中山道の一端、木曽路の風景を大写しにする。ここにおいて島崎藤村がこれから展開すべく物語を暗示している。いきなり主人公たちを登場させて、読者を物語に導き込むのでなく、先ず空間を認識させる。次に街道の位置が変えられ、歩きやすく改良されたことが書き記されて街道の役割が語られる。つまり、歴史的経過が語られることで読者は、この木曽路の位置を時間的な座標により知り、江戸時代での役割を徳川幕府の政策により知る。そして本陣の当主吉左衛門が登場して舞台が幕末であることを読者は知る。さらには参覲交代の叙述が展開されることでいよいよこの街道とそこに住む人たちとの関わり合いが繰り広げられていくことが示されている。つまり、街道を含めることで人々の生活の全体を空間的にも時間的にも描き出そうとしているのである。

藤村がこの小説を書くにあたって歴史的事実を織込んでいかなければならない理由はここにあると言えよう。では何故このような創作方法を採用したか。これまで本論で『新生』をたどり、フランス体験を知る中で藤村の思いの変化がどんなであったかを知ってきた。

第一次世界大戦下で、フランスの文学者たちが大統領ポワンカレの呼びかけで結成された神聖連合に呼応して、祖国フランスのためにと行動し、積極的に政治的発言をしているのを藤村は見聞した。文化の担い手が社会に関わり合うべきとしたのであるが、その時点では藤村自らが社会とは無縁の状態にあることを知ったのである。さらには彼らが従軍し、命さえ落としている。これらの事実を知ったとき、藤村自身がフランスに滞在している理由を自問したらどうなるか。姪との関係が第一の理由として挙げられるにしても、その状態に陥った背景をも考慮せねばなるまい。藤村自身が言う「デカダンス」である。

これを時代がもたらしたとしても良いが、むしろ藤村の創作状況を見ておきたい。そのためにも彼の作品傾向を再度たどる。『破戒』と種々の雑誌に一回のみ掲載の短篇小説を除いて連載による長篇ものを挙げてみる。先ず『春』は1908年（明治41）4月7日から「東京朝日新聞」に135回に渡って連載された。『家』は1910年（明治43）1月1日から「読売新聞」に連載されること112回で、後に『家』の下巻となった『犠牲』は1911年（明治44）の一月号と四月号の「中央公論」に分載された。そして1912年（明治45）五月号からの月刊誌「婦人畫報」に連載された『ある婦人に興ふる手紙』は五回の後、1913年（大正2）一月号からは『幼き日』と改題されて三回の継続となった。『千曲川のスケッチ』は1911年（明治46）六月号の「中學世界」から十二回に渡って連載された。

上に挙げた『春』、『家』、『幼き日』はいずれも藤村自身と周囲の人々の生活を描き出したものである。つまり私小説としてよい。自己体験の記録として捉えることが可能だ。それ故に長篇ものとしての題材とすることができたのである。むろん単なる記録ではなく、文学作品として位置づけるべく主題を有している小説である。だが、社会との関わり合いの中で位置づけるにはむずかしい。確かに主人公を含めた登場人物たちは種々の社会制度や習慣、しきたりに時として振り回されてい

る。それらは付与のものとされ、告発するには迫力がない。自然主義が封建社会の解体を狙うとされたようだが、藤村の作品を見る限りはなはだ怪しく思える。むしろ、それらを運命として受けとめ、受身的に生きる人物たちの状態は暗い、とまでは言わないにしても憂欝な気分に読者を導いている。だからこそ「こんな自分でも生きたい」と藤村は主人公に言わしめるのだ。

『千曲川のスケッチ』は、小諸で散文作家になるための習作をまとめたものと思われる。従って『千曲川のスケッチ』を形あるものとして編成することは、小諸時代の心の状態を得るべく、つまり散文作家としての初心に戻り、新たな創作活動のための模索状態としてよいだろう。この『千曲川のスケッチ』に描かれたのは千曲川の周辺に生きる人々を外側から素描したのであって、彼らの内面に立ち入ることはない。藤村は小諸時代のことをしばしば「山の生活」としているが、この山の人々の厳しい自然の中での生活に関心を持ちながら、この時期に作品として発表することはこの彼らのしたたかに生きる秘密を見つけ出そうとしたのではあるまいか。

一方で「黒船」にも関心を持っていた(1)。この「黒船」を題材に作品化するためには、おそらく父親の島崎正樹をモデルにしたいと考えたであろうが、フランス体験を経て初めて可能であったろう。図らずも藤村は回想している。『春』に関して語っているときである。

「或る短篇を書いてゐるうちには、外の短篇を書いてみやうと思ふ心が胸に浮かんで來、長篇を書いてゐるうちには次ぎの長篇の腹案が自然と胸に浮んでくる。と言ふのは、短篇は短篇を呼び出し、長篇は長篇を喚び出すと言ふ心持です。

……略……

私は『破戒』を書いてゐるうちに、この『春』を書かうと思ひ付きまして、……略……それから『春』を書いてゐるうちにまた今度は『家』を書かうといふ意匠が、あとから芽ぐんで來ました。ところが『家』を書いてゐる間に、今度は、その次ぎの長篇といふものが、胸に芽ぐんでこなくなつてしまつた。──あの時は、自分でも心に寂しく思ひました。」(2)

創作不能の状態であったとしたら言過ぎであろうか。ここから脱出するためには『新生』の作品化が必要であった。その経過は本論の展開で理解していただいたと思うが、再度確認しておきたい。

特に『新生』の第二巻であり、帰国後に復活した姪との関係である。二人の到達した境地は──これを宗教的な境地としたら曖昧になり理解が容易でなくなる──北村透谷の指摘するような「想世界」と「実世界」の対立として捉えるのではなく、「人と人との真実がある」ことを知った状態にある。そして現実世界のできごとによって振り回されることなく、相互の信頼によって自己の存在価値を揺るぎないものとして獲得した。さらに言い換えるなら、藤村が社会に関心を持ち、幼き心を知ることで人間を信じることに至り、その上で女性から信頼される。この時点に到達して初めて自己の存在を肯定することができる。つまりそれまで単なる願望に過ぎない「こんな自分でも生きたい」とする思いは、「生きるんだ。その価値あり」に変貌し自分自身の価値を見出したのである。自己統一（identitē du moi）の獲得である。だからこそ『新生』は文学的主題を織り込んだ作品化とすることが可能となった。この作品を著すことで作者自身が新たに獲得した位置である。今や藤村は次に引用する北村透谷の言う状態にあると断言できよう。

「戀愛あらざる内は、社會は一個の他人なるが如くに頓着あらず、戀愛ある後は物のあはれ、風物の光(あり)景(さま)、何となく假を去って實に就き、隣家より吾家に移るが如く覺ゆるなれ。」(3)

確かに恋愛経験はあらゆるものを恋人に結びつけて考えるようになる。しかし透谷が「社會」とすることに注目したい。創造力がさらに豊かになり、恋人との関係のみならず、その力が広がりをもつことを意味しているとしてよいだろう。とりわけ恋愛関係が生活習慣や制度などで阻まれそうになったとき、その瓦解を防ぐときに考える力として発揮される。二人で生きんがために。恋愛は生きる力を与えるのである。

この時点に至って藤村は創作不能の状態から脱したのであり、父親の内面にも入ることが可能に

なったのである。だが父親をモデルとした小説を書くにしても今度は「黒船」を知らなければならない。「黒船」を知るためには当時の状況を知ることが必要だ。時代と社会の中での父親の位置を正確に捉え、主人公としての青山半藏に、作者藤村の思い描く世界で行動をとらしめるために生命を吹込む。さらにこの主人公の行動と思いを読者に伝えるためには木曽路を通過する情報やその時代の背景を丹念に叙述する必要があった。これがために『夜明け前』では歴史的事実の叙述部分が全体のほぼ二割を占めているのである。

Ⅳ-2-(2)

青山半藏の名が初めて出るのは序の章である。この章では木曽路と馬籠の宿、ペリーが浦賀に来る直前の時期の生活風景と幕藩体制による宿場の種々の制度が紹介され、宿役人である本陣の吉左衛門と年寄役の金兵衛が登場する。この吉左衛門の回想シーンに十八歳の半藏が登場する。木曽の山林が尾張藩によって厳重に保護されていることが語られた後、多数の山村の民が生活のために盗木した罪で科められていた。この光景を覗き見していたのが半藏である。

「當時十八歳の半藏は、眼を据ゑて、役人のすることや、腰縄につながれた村の人達のさまを見てゐる。それに吉左衛門は氣がついて、
『さあ行つた。行つた――こゝはお前達なぞの立つてるところぢやない。』
と叱つた。(『夜明け前』序の章三節)」[4]

この十八歳の青年にこの事件はどのように眼に映ったろうか。生活のために盗木をしたことが理解されていたろうか。尾張藩が定めていた制度や禁止事項を知りながら、陰でこの禁を破る大人たちの行動をどのように見ていたろうか。大人たちとは言え、同じ村の人たちである。常日頃の親しい人たちである。本陣の息子として半藏を可愛がっていた大人たちかもしれぬ。その彼らが木曽福島から来た、半藏にとっては見知らぬ役人に罰を受けていたのである。半藏が目にしていたのは初めて見る世の矛盾であったかもしれない。大人の二面性つまり面従腹背を知るのでなく、村人の苦しい生活を知っているが故に生じた、制度に対する疑問を知ったとしてよいだろう。吉左衛門はだからこそ大人たちの醜態を半藏に見せたくなかったのである。例えば次のようなこともあった。半藏の結婚準備に追われているさなかに、黒船来航による国防献金の命令書が吉左衛門にとどいたときである。

「徳川幕府あつて以來未だ曾て聞いたこともないやうな、公儀の御金庫が既に空つぽになつてゐるといふ内々の取沙汰なぞが、その時、胸に浮んだ。昔氣質の彼はそれらの事を思ひ合せて、若者の前でも何でもお構ひなしに何事も大袈裟に觸れ廻るやうな人達を憎んだ。そこから子に對する心持をも引き出されて見ると、年もまだ若く心も柔かく感じ易い半藏なぞに、今から社會の奥を覗かせたくないと考へた。いなかる人間同志の醜い秘密にも、その刺激に耐へられる年頃に達するまでは、ゆつくり支度させたいと考へた。權威はどこまでも權威として、子の前には神聖なものとして置きたいとも考へた。(第一章三節)」[5]

ここには、学問世界に没頭したいとする息子半藏が混乱しないようにとする、現実世界の急激な変化を予想する父吉左衛門の心がある。先の吉左衛門の回想シーンでは、むろん半藏の内面にまでは立ち入ってはいない。

次に半藏の名が登場するのは青山家の歴史が語られる中で、吉左衛門が他家との違いを強調する場面である。

「隣家の伏見屋なぞにない古い傳統が年若な半藏の頭に深く刻みつけられたのは、幼い頃から聞いたこの父の炬燵話からで。自分の伜に先祖のことでも語り聞かせるとなると、吉左衛門の眼はまた特別に輝いたものだ。……(略)……
吉左衛門の代になつても、本陣へ出入りの百姓の家は十三軒ほどある。その多くは主従の關係に近い。吉左衛門が隣家の金兵衞とも違つて、村中の百姓を殆ど自分の子のやうに考へてゐるのも、由來する源は遠かつた。(第一章一節)」[6]

この青山家の歴史を再現する必要はあるまい。

半藏はこの父吉左衛門から語られる祖先たちのことから、奢りを心に持つことはない。むしろ上に引用したような父親の考えを受け継いだのである。徳川の幕藩体制下にあって支配する側の組織の末端に位置する宿役人の考え方である。支配される村人たちとの接点に位置するがためである。制度上から見ればこのように言えるかもしれぬが、現実の日常生活にあっては村人たちの生活を良く知っており、むしろ支配される側の代表者として位置づけてよいだろう。

黒船が登場したのは半藏が二十三歳の時である。十歳の頃に馬籠に住んでいた医者に『詩經』を学び、萬福寺の和尚に導かれ、父からは『故眞實』の句読を受け、以後は独学で『四書』『易書』『春秋』を読破した。さらには三里ほど離れた中津川に友人、蜂谷香藏を得て、その義兄の宮川寛齋に漢学と国学を学んだ。

「『自分は獨学で、そして固陋(ころう)だ。もとよりこんな山の中にゐて見聞も寡(すくな)い。どうかして自分のやうなものでも、もつと学びたい。』

と半藏は考へ考へした。古い青山の家に生れた半藏は、この師に導かれて、國学に心を傾けるやうになつて行つた。二十三歳を迎へた頃の彼は、言葉の世界に見つけた學問の歡びを通して、賀茂眞淵、本居宣長、平田篤胤などの諸先輩が遺して置いて行つた大きな仕事を想像するやうな若者であつた。

黒船は、實にこの半藏の前にあらはれて來たのである。（第一章二節）」(7)

ここに半藏の生涯の課題は示された。宿役人としての後継者である地位にいること、国学をさらに深めたいとする向学心に燃えた心の持ち主であることの二点である。

Ⅳ 2－2－（3）

吉左衛門は半藏の結婚話を進めるが、その理由を次のようにする。

「隣宿妻籠(つまご)の本陣、青山壽平次(じゆへいじ)の妹、お民といふ娘が半藏の未來の妻に選ばれた。この伜の結婚には、吉左衛門も多くの望みをかけてゐた。早くも青年時代にやつて來たやうな濃い憂欝が半藏を苦めたことを想つて見て、もつと生活を變へさせたいと考へることは、その一つであつた。六十六歳の隠居半六から家督を譲り受けたやうに、吉左衛門自身もまた勤められるだけ本陣の當主を勤めて、後から來るものに代(よ)を譲つて行きたいと考へることも、その一つであった。（第一章二節）」(8)

この「濃い憂欝」については藤村は明確なことばで表現はしない。男女関係とそれにまつわる性のことであろう。だがこの「憂欝」は別の意味にもとれる。結婚の儀が慌ただしく、賑々しく過ぎ去った後、半藏は時代の趨勢を思いやりながら、想いに耽ける。

「その日、半藏は店座敷に籠つて、この深い山の中に住むさみしさの前に頭を垂れた。障子の外には、塀に近い松の枝をすべる雪の音がする。それがおそろしい響を立てゝ庭の上に落ちる。街道から聞えて來る人馬の足音も、絶えたかと思ふとまた續いた。『こんな山の中にばかり引つ込んでゐると、何だか俺は氣でも違ひさうだ。みんな、のんきなことを言つているが、そんな時世ぢやない。』と考へた。（第二章二節）」(9)

この半藏を気づかう妻お民は半藏と思いを共にしようとするが、半藏は突き放して自分の世界に入り込んでしまう。

「いつでも半藏が心のさみしい折には、日頃慕つてゐる平田篤胤の著書を取り出して見るのを癖のやうにしてゐた。『靈(たま)の眞柱(みはしら)』、『玉だすき』、それから講本の『古道大意』なぞは讀んでも讀んでも飽きるといふことを知らなかつた。大判の薄藍色(うすあゐいろ)の表紙から、必ず古代紫の糸で綴ぢてある本の装幀までが、彼には好ましく思はれた。『靜の岩屋』、『西籍概論』の筆記録から、三百部を限りとして絶版になつた『毀譽(きよ)相半ばする書』のやうな氣吹の舍の深い消息(いぶき)までも、不便な山の中で手に入れてゐるほどの熱心さだ。平田篤胤は天保十四年に没してゐる故人で、この黒船騒ぎなぞをもとより知りやうもない。あれほどの強さに自國の學問と言語の獨立を主張した人が、嘉永安政の代に活きるとしたら――すくなくともあの先輩はどうするだらうとは、半藏のやうな

青年の思ひを潛めなければならないことであつた。
　新しい機運は動きつゝあつた。全く氣質を相異にし、全く傾向を相異にするやうなものが、殆んど同時に踏み出そうとしてゐた。長州萩の人、吉田松陰は當時の嚴禁たる異國への密航を企てゝ失敗し、信州松代の人、佐久間象山はその件に連坐して獄に下つたとの噂すらある。美濃の大垣あたりに生れた青年で、異國の學問に志し、遠く長崎の方へ出發したといふ人の話なぞも、決してめづらしいことではなくなつた。
『黒船。』
　雪で明るい部屋の障子に近く行つて、半藏はその言葉を繰り返して見た。遠い江戸灣のかなたには、實に八九艘もの黒船が來てあの沖合に掛つてゐることを胸に描いて見た。その心から、彼は尾張藩主の出府も容易でないと思つた。(第二章二節)」[10]

作者藤村が早くも半藏に味わせる苦悩とは変貌を遂げんとする社会との関わり合いをどのようにするかという点である。
　そして藤村がこの小説の中に用意したものは萬福寺の和尚、松雲である。半藏は、自分の知らぬ地、京都での修業を羨ましいとしながらもその松雲を村はずれで待ち受ける。

「半藏がこの和尚を待ち受ける心は、やがて西から歸つて來る人を待ち受ける心であつた。彼が家と萬福寺との縁故も深い。最初にあの寺を建立して萬福寺と名づけたのも青山の家の先祖だ。しかし彼は今度歸國する新住職のことを想像し、その人の尊信する宗教のことを想像し、人知れずある豫感に打たれずにはゐられなかつた。早い話が、彼は中津川の宮川寛齋に就いた弟子である。寛齋はまた平田派の國學者である。この彼が日頃先輩から教へらるゝことは、暗い中世の否定であつた。中世以来學問道徳の權威としてこの國に臨んで來た漢学び風の因習からも、佛の道で教へるやうな物の見方からも離れよといふことであつた。それらのものゝ深い影響を受けない古代の人の心に立ち歸つて、もう一度心寛かにこの世を見直せといふことであつた。一代の先驅、荷田春満をはじめ、賀茂眞淵、本居宣長、平田篤胤、それらの諸大人が受け繼ぎ受け繼ぎして來た一大反抗の精神はそこから生れて來てゐるといふことであつた。彼に言はせると、「物學びするともがら」の道は遠い。もしその道を追ひ求めて行くとしたら、彼が今待ち受けてゐる人に、その人の信仰に、行く行く反對を見出すかも知れなかつた。(第二章一節)」[11]

　しかしながら、半藏より六・七歳ほど年上の松雲を、半藏は「人を憎むことの出來ないやうな善良な感じのする心の持主(同)」[12]という印象を持つ。そして村では、松雲の留守中に寺を整えた宿役人たち、つまり半藏の父親たちは松雲を歓待し、歓迎した。むろん上に引用した半藏の思いなぞは村人や松雲には分からない。その翌日の早朝、松雲は勤行の一番に大鐘を打って澄んだ鐘の音を村中に響かせる。松雲の馬籠での生活は始まる。だが時局の一大事、沿岸警備の関連で江戸に出府する尾張藩主の妻籠通過にも動ぜず、往来で迎えることもしない。

「『お前さまはお留守居かなし。』
『そうさ』
『俺は今まで畠にゐたが、餅草どころぢゃあらすか。けふのお通りは正五つ時だげな。殿様は下町の笹屋の前まで馬に騎つておいでで、それから御本陣までお歩行だげな。お前さまも出て見さつされや。』
『まあ、わたしはお留守居だ。』
『こんな日にお寺に引つ込んでゐるなんて、そんなお前さまのやうな人があらすか。』
『さう言ふものぢやないよ。用事がなければ、親類へも行かない。それが出家の身なんだもの。わたしはお寺の番人だ。それで澤山だ。』(第二章二節)」[13]

　松雲和尚の姿勢を読者に示すべく、藤村がこのような場面を設定したのにはむろん理由がある。半藏の対極に松雲を位置づけているのである。宿役人たちの寺の保守と手厚い歓迎は、先祖が敬ってきたからばかりでなく、村のみならず幕藩体制を支えるべき精神界の権威者とみなしているが故である。この動じない松雲の姿は、半藏のごとく「憂欝」にとらわれていない。街道の際にあっても寺の住職として生涯を全うせんとする意志がある。この松雲を、藤村は街道宿の片隅に置き、その一方で半藏の生涯をたどろうとすることに留意

しておきたい。松雲に関する描写であるが、極めて象徴的な様相を示しているので次に引いておきたい。

「方丈もしんかんとしてゐた。まるでそこいらは空つぽのやうになつてゐた。松雲は唯一人黙然として、古い壁にかゝる達磨の畫像の前に坐りつゞけた。(同)」(14)

Ⅳ－2－（4）

木曽路には様々なことが通過する。なにも人やものばかりではない。「黒船」の来航が伝えられて始まるこの小説には、先にも触れたが、幕末の事件が記される。その全てが半藏の認識した事柄ではないことは言うまでもない。半藏にある事件の一端が伝えられれば、作者藤村は及ぶ限り歴史的事実を明らかにする。もちろん中には藤村自身の解釈も含まれている部分もある。この歴史的事実は半藏のたどる宿命を暗示し、彼の考えや行動を導き出す伏線である。

半藏が結婚してほぼ十年後、半藏はある行動をとる。その行動は、自らの位置を見つめようとする作業でもある。その十年間には黒船に対する沿岸警備の政策、江戸大地震による水戸の国学者藤田東湖の死、神奈川条約の締結、安政の大獄、咸臨丸の渡米、桜田門外の変、和宮の降嫁、坂下門外の変、生麦事件などを中心としてつぎつぎに伝えられた。そして京都を中心に攘夷排外熱が高まっている時点に至っては、宮川寛齋のもとで半藏と共に学んだ淺見景藏と蜂谷香藏は京都に出かけ、国学者たちと行動した。半藏は「どうも心が騒いで仕方がない（第七章二節）(15)」としながらも、逆に山の中に入ったのである。御嶽神社への参籠である。父吉左衛門の病を祈るためもあったが、自分がどのように今後行動すべきかを、探るべく内省のためであった。騒然とした時代状況とはかけ離れた位置に藤村は半藏を導く。

「漸く。さうだ、漸く半藏は騒ぎ易い心を沈ちつけるにいゝやうな山里の中の山里とも言ふべきところに身を置くことが出來た。王瀧は殊に夜の感じが深い。暗い谷底の方に燈下の泄れる民家、川の流れを中心に湧き立つ夜の靄、すべてがひつそりとしてゐた。舊暦四月のおぼろ月のある頃に、この靜かな森林地帯へやつて來たことも、半藏をよろこばせた。(第七章三節)」(16)

そして半藏は状況を省察する。

「攘夷――戦爭をも敢て辭しないやうなあの殺気を帯びた聲はどうだ。半藏はこのひっそりとした深山幽谷の間へ來て、敬慕する故人の前に獨りの自分を持つて行つた時に、馬籠の街道であくせくと奔走する時にも勝して、一層はつきりとその聲を耳の底に聞いた。景藏、香藏の親しい友人を二人までも京都の方に見送つた彼は、ぢつとしてはゐられなかつた。熱する頭をしづめ、逸る心を抑えて、平田門人としての立場に思ひを潜めねばならなかつた。その時になると、同じ勤王に志すとは言つても、その中には二つの大きな潮流のあることが彼に見えて來た。水戸の志士藤田東湖等から流れて來たものと、本居平田諸大人に源を發するものと。この二つは元來同じものではない。名高い弘道館の碑文にもあるやうに、神州の道を敬ひ同時に儒者の教をも崇めるのが水戸の傾向であつて、國學者から見れば多分に漢意の混つたのでもある。その傾向を押し進め、國家無窮の恩に報いることを念とし、楠公父子ですら果さうとして果し得なかつた武将の夢を實現しやうとしてゐるものが、今の攘夷を旗印にする討幕運動である。もとより攘夷は非常手段である。そんな非常手段に訴へても、眞木和泉等の志士が起した一派の運動は行くところまで行かずに置かないやうな勢を示して來た。(同)」(17)

そして平田篤胤の『靜の岩屋』を開き異国について語る部分を目にする。その一部をつぎに引用しておきたい。

さて又、近頃西の極なる阿蘭陀といふ國よりして、一種の學風おこりて、今の世に蘭學と稱するもの、即ちそれでござる。元來その國柄と見えて、物の理を考へて考へ究むること甚だ賢く、仍ては發明の説も少なからず。天文地理の學は言ふに及ばず、器械の巧みなること人の目を驚かし、醫藥製煉の道殊にくはしく、その書どもゝつぎつぎと渡り來りて世に弘まりそめたるは、即ち神の御心であらうでご

ざる。　……（略）……
さて、その究理のくはしきは、悪しきことにはあらざれども、彼の紅夷ら、世には眞の神あるを知らず。人の智は限りあるを、限りなき萬づの物の理を考へ究めんとするにつけては、強ひたる説多く、元よりさかしらなる國風なる故に、現在の小理にかゝはつて、かへつて幽神の大儀を悟らず。それゆへにその説至つて究屈にして、我が古道の妨げとなることも多いでござる。さりながら、世間の有様を考ふるに、今は物ごと新奇を好む風俗なれば、この學風も需佛の道の榮えたるごとく、だんだんと弘まり行くことであらうと思はれる。しからんには、世のため、人のためとも成るべきことも多からうなれども、又、害となることも少なかるまいと思はれるでござる。是こそは彼の吉事に是の凶事のいつぐべき世の中の道なるをもつて、さやうには推し量り知られることでござる。そもそもかくかく外國々より萬づの事物の我が大御國に参り來ることは、皇神たちの大御心にて、その御神徳の廣大なる故に、善き悪しきの選みなく、森羅萬象ことごとく皇國に御引寄せあそばさるゝ趣きを能く考へ辨へて、外國より來る事物はよく選み採りて用ふべきことで、申すも畏きことなれども、是すなはち大神等の御心掟と思ひ奉られるでござる。（同）」[18]

さらに半藏の感想である。

「半藏は深い溜息をついた。それは、自分の淺學と固陋と馬鹿正直とを嘆息する聲だ。先師と言へば、外國より入つて來るものを異端邪説として蛇蝎のやうに憎み嫌つた人のやうに普通に思はれてゐるが、『靜の岩屋』なぞをあけて見ると、近くは朝鮮、支那、印度、遠くは西の阿蘭陀まで、外國の事物が日本に集まつて來るのは、即ち神の心であるといふやうな、こんな廣い見方がしてある。先師は異國の借物をかなぐり捨てゝ本然の日本に歸れと教へる人であつても、無闇にそれを排斥せよとは教へてない。（同）」[19]

断っておきたいが、ここまでは半藏が参籠する前夜での場面である。では参籠中の半藏の思いはどこに向ったか。時代の波が襲った馬籠のみならず木曽路に向ったのである。参覲交代制度が崩れてきた以降のできごとである。

「『憐むべき街道の犠牲。』
と半藏は考へつゞけた。上は浪人から、下は雲助まで、世襲過重の時代が生んだ特殊な風俗と形態とが眼につくだけでも、何となく彼は社會變革の思ひを誘はれた。庄屋としての彼は、いろいろな意味から、下層にあるものを護らねばならなかつた……
ふと我に返ると、靜かな讀經の聲が半藏の耳に入つた。にはかに明るい日の光は、屋外にある杉の木立を通して、社殿に満ちて來た。彼は、單純な信仰に一切を忘れてゐるやうな他の参籠者を眼の前に眺めながら、雜念の多い自己の身を恥ぢた。（第七章四節）」[20]

帰り際に半藏の決意が示される。

「『さうだ、われわれはどこまでも下から行かう。庄屋には庄屋の道があらう。』
と彼は思ひ直した。水垢離と、極度の節食と、時には瀧にまで打たれに行つた山籠りの新しい經驗をもつて、もう一度彼は馬籠の驛長としての勤めに當らうとした。（同）」[21]

かくて青山半藏は三十三歳にして、自分の位置を確かめ、生涯の方向を定めた。このように半藏を藤村が描くとき、その意図は明確になる。学問をすることで自らの精神世界を確立せしめ、現実社会の、時として人々の運命を変えてしまう種々の事象の中での関わり合いをどうするかに狙いを定めて思慮を深めさせる。半藏はこの考えに沿って描かれたのである。そして西洋文化の象徴として「黒船」を捉えた藤村は、半藏を社会との関わり合いの中で描き、あわせてフランス体験で得た思索をもこの小説の中で具現化したのである。

V－1

『夜明け前』の一節に次のような部分がある。討幕運動が進み、水戸の浪士が伊那から馬籠を経て通過した後、半年が経過した頃である。

「假りに楠公の意氣をもつて立つやうな人がこの徳川の末の時代に起つて來て、往時の足利氏を討つ

やうに現在の徳川氏に當るものがあるとしても、その人が自己の力を過信し易い武家であるかぎり、またまた第二の徳川の代を繰り返すに過ぎないのではないかとは、下から見上げる彼のやうなものが考へずにはゐられなかつたことである。どんな英雄でもその起る時は、民意の尊重を約束しないものはないが、一旦權力をその掌中に収めたとなると、嘗て民意を尊重したゝめしがない。(第十一章三節)」[22]

武士たちの討幕運動を聞き、考えた末での思いであり、半藏はさらに考えを展開する。

「考へ續けて行くと、半藏は一時代前の先輩とも言ふべき義髄に何と言つても水戸の舊い影響の働いてゐることを想ひ見た。水戸の學問は要するに武家の學問だからである。武家の學問は多分に漢意の混つたものだからである。(同)」[23]

この義髄とは伊那の倉澤義髄で、半藏には国学を通じての先輩になる。だが義髄の場合は水戸学から入り、平田派に移ったという事情がある。水戸浪士が通過した後、京都に向かい勤皇の志士たちと交流し、帰郷前に馬籠に立寄ったのである。その旅の話を聞いた後での半藏の思いはひとつの結論に至る。

「武家中心の時は漸く過ぎ去りつゝある。先輩義髄が西の志士等と共に畫策するところのあつたといふことも、もしそれが自分等の生活を根から新しくするやうなものでなくて、徳川氏に代るもの出でよといふにとゞまるなら、日頃彼が本居平田諸大人から學んだ中世の否定とはかなり遠いものであつた。その心から、彼は言ひあらはしがたい憂ひを誘はれた。(同)」[24]

そして本居宣長を読んだ後の半藏の解釈である。これはそのまま藤村の解釈でもある。

「多くの覇業の虚僞、國家の爭奪、權謀と術數と巧智、制度と道徳の假面なぞが、この『直毘の靈』に笑つてある。北条、足利をはじめ、織田、豊臣、徳川なぞの武門のことはあからさまに書かれていないまでも、すこし注意してこれを讀むほどの人で、この國の過去に想ひ致らないものはなからう。『直毘の靈』の中には又、中世以來の政治、天の下の御制度が漢意の移つたもので、この國の青人草の心までもその意に移つたと歎き悲しんである。『天皇尊の大御心を心とせずして、己々がさかしらごゝろを心とする』のは、即ち異國から學んだものだと言つてある。武家時代以前へ――もつと精しく言へば、楠氏と足利氏との對立さへなかつた武家以前への暗示がこゝに與へてある。御世々々の天皇の御政はやがて神の御政であつた、そこにはおのづからな神の道があつたと教へてある。神の道とは、道といふ言擧げさへも更になかつた自然だ、とも教へてある。

この自然に歸れ、といふ風に、後から歩いて行くものに全く新しい方向を指し示したのが本居大人の『直毘の靈』だ。この歡びを知れ、といふ風に言葉の探求から這入つた古代の發見をくはしく報告したものが、翁の三十餘年を費した『古事記傳』だ。直毘（直び）とはおのづからな働きを示した古い言葉で、その力はよく直くし、よく健かにし、よく破り、よく改めるをいふ。國學者の身震ひはそこから生れて來てゐる。翁の言ふ復古は更生であり、革新である。天明寛政の年代に、早く夜明けを告げに生れて來たやうな翁の指し示して見せたものこそ、まことの革命への道である。(第十二章四節)」[25]

そしてもう一節を引用する。『夜明け前』第二部に入って、つまり明治期になってからの征韓論が展開されているときである。歴史的記述の部分で藤村の含みがあるとしてよいだろう。

「所謂壯兵主義を抱く豪傑連の中には、あわたゞしい世態風俗の移り變りを見て、追々の文明開化の風の吹廻しから人心うたゝ浮簿に流れて來たとの慨きを抱き、甚しきは楠公を權助に比するほどの偶像破壊者があらはれるに至ったと考へ、かゝる天下柔弱輕佻の氣風を一變して、國勢の衰へを回復し諸外国の覬覦を絶たねばならないとの意見を持つものがあるやうになつた。古今内外の歴史を見渡して、外は外國に侮られ、内は敵愾の氣を失ひ、人心は惰弱に風俗は日々頽廢しつゝあるやうな危殆極る國家は、これを救ふに武の道を以てするの他、決して

他の術がないとは、それらの人達が抱いて來た社會改革の意見であつた。それには文武共に今日改造の途上にあることを一應考慮しないではないが、一ト先づ文教を後廻しにする、この際は斷然武政を布いて國家の獨立を全うするためには外國と一戦するの覺悟を取る、それが國を興すの早道だといふのである。(第二部第十三章三節)」(26)

征韓論を主張するものの言であるが、そのまま昭和初期の時点で展開しても不自然とはならない。藤村がこれらを書くとき、読者は藤村なりの明治維新否定論の展開として受取ってしまうだろう。つまり、維新を成し遂げたのは勤皇の志士であり、水戸学派の流れを汲んだ武士である。半藏の期待はみごとに裏切られたのである。その流れは明治期を経て、藤村の記す「壯兵主義」となって、大正、昭和へと連綿とつながっている。

藤村がこの『夜明け前』を書き始めたのは1929年（昭和4）である。すでに治安維持法は成立し、満州事変を経て、日本が国際連盟を脱退した後に小説は完結している。藤村自身が生きている時代を意識しないとは言えまい。むしろこの作品を書くことで自らの役割を果たそうとしているとしてよいはずだ。「義父(おやじ)は太平洋戦争を批判していました」と四女柳子氏の夫、井出五郎氏は語っている(27)。これより数年前、小海線の車内で偶然筆者に出会った井出氏は語った。「真珠湾攻撃に成功したとき朝日新聞にコメントを求められたが、義父(おやじ)は拒否したよ。」近親者に語る内容を我々は容易に否定できないだろう。

ともかくも、藤村は『夜明け前』を書き上げることで、初めて自らの位置を不動のものにしたのである。六十四歳のときであった。

V－2

『夜明け前』には歴史的事実が環境として設定されて一人の人間が描き出されている。この他に藤村の作品で社会性を帯びたものに『破戒』があるのは良く知られている。この『破戒』を読み終えてやりきれなさを味わうのは筆者ばかりではあるまい。主人公瀬川丑松が父親に「隠せ」と言われた戒めを破り、教え子たちの前で土下座をしながら明らかにする。教え子たちに慕われながらもテキサスへ行こうとし、恋人お志保との結婚生活も暗示されて終っている。丑松の新生活に明るい未来が来ると想定しても良いはずだ。だがその場面を読者が思い描くことはできても、霧がかかっているようで判然としないだろう。作者藤村がアメリカでの生活を具体的には表現していないし、読者がその地での生活状態を知らなければなおさらである。しかしこれは問題にならない。

問題とすべきは丑松が部落出身者とされた宿命という点である。時代は藤村が小諸に滞在した時期、つまり明治三十年代として良いだろう。部落解放の水平社運動が始まる以前である。明治政府が「新平民」とすることで身分差別をなくしたとしても表面的に過ぎず、差別は厳然と残っていた時代である。支配階級が江戸時代の名残りを積極的に解消しないで、分断政策として温存していたと言うべきであろう。ところが丑松は自らの境遇を天から与えられたものとして捉えている。変えることのできぬどうにもならぬ宿命として受け止めている。その上、勉学をして師範学校に進み、教師の道を選んだことさえ後悔している。

「其時に成つて、丑松は後悔した。何故、自分は學問して、正しいこと自由なことを慕ふやうな、其様な思想(かんがへ)を持つたのだらう。同じ人間だといふことを知らなかつたなら、甘んじて世の軽蔑を受けても居られたらうものを。何故、自分は人らしいものに斯世の中へ生れた來たのだらう。野山を驅け歩く獣の仲間ででもあつたなら、一生何の苦痛(くるしみ)も知らずに過されたらうものを。(『破戒』第拾九章七節)」(28)

丑松が学問をしたことで構築したはずの想世界は実世界における自らの位置を正当化し得るものにはならなかった。猪子蓮太郎のような行動を取るほどには社会を未だ見定めてはいない。丑松の師である蓮太郎は自らの出身を恥としない。蓮太郎自身の構築した想世界があって自分の思想に基づいて行動しているのである。丑松は蓮太郎の世界を知っているはずだ。だが行動にはならない。宿命に、実世界に翻弄されている。こうした丑松を見ていると、藤村が「こんな自分でもどうにかして生きたい」とすることを想起させられる。実世界を如何ともしがたいとすることは、自らの内

に秘めたる想世界をもってして対峙せんとしても実世界の優越性を前にして膝を屈することに他ならない。これがために『破戒』が形の上からではハッピーエンドとなり得ても、読む我々にやりきれなさを抱かせるのであろう。

では、『夜明け前』の青山半藏の場合はどうか。半藏にしても江戸末期に生れ、政治体制の変革を体験するほどの激動の時代に生きた。国学を通じて自らの想世界を作り上げ、蓮太郎のように行動したが、丑松の師と同様に犠牲者となった。この半藏もやはり実世界のできごとに翻弄されている。街道筋の馬籠の宿役人としての宿命を与えられたが故に支配者と被支配者の間で板挟みになった。座敷牢に入れられながらも、うたを読み、最後には狂死した。この半藏も実世界を前にして膝を屈したのである。読者は『破戒』を読み終ったときのようにやりきれなさを抱くだろうか。むしろほっとした気分になりはしまいか。読者は半藏という人間と共に生きたということ、作者藤村に導かれて半藏の生涯をつぶさに見たということ、これらが読者に、上に書いたような気分を生じせしめるのであろう。

今、筆者は『破戒』と『夜明け前』の主人公たちは宿命あるいは実世界に翻弄されたとした。だがそこに違いを見つけることができる。この二つの作品において、藤村による宿命あるいは実世界に関する認識の仕方が違っている。半藏を描き出す場合、作者が歴史的事実を叙述することで主人公の位置を明確にし、国学を通じて、実世界にあってはどう対応すべきかを想世界の中で確立せしめた。『破戒』の場合にはこのような設定がない。定められた宿命に翻弄され、痛めつけられる人間が描き出されるのみだ。丑松の宿命が、そして部落とは何であるかを説くことなしに読者はいきなり丑松の心の中に導かれてしまう。丑松の心境を通じて部落問題を小説化させることで、同時に現実を暴露することで社会を告発した作品として良いだろう。だが先にも書いたように「どうにかして生きたい」とする作者藤村自身の考え方が反映されているがために、『夜明け前』のような充実感を与えていない。

V－3

島崎藤村の最も苦しかった時代は、明治末期から大正初期にかけてである。妻フユが他界した頃から子供たち全員をひきとって生活を始めた頃までである。年齢からすれば39才からほぼ十年間ということになる。この間に著された長編作品は『櫻の實の熟する時』と『新生』である。『櫻の實』が破棄されて『櫻の實の熟する時』が書き始められたのはフランス滞在中である。この二つの作品の主人公は同姓同名であり、『櫻の實の熟する時』では主人公が十代後半が、『新生』ではそれより二十数年後の四十代前半の体験が展開されている。内容はいずれも女性に関わることである。『櫻の實の熟する時』が女性と別れることで終っているのに比して、『新生』は同じ別れでも相互の信頼を得ての別れである。『櫻の實の熟する時』はこの十年間の半ば過ぎに書かれ、『新生』は前半部分を対象として後半部分の時に書かれている。つまり、『櫻の實の熟する時』は姪との関係を冷静に見つめ始めた時（フランス滞在中）に自らの十代を振り返りながら書き始めたのである。これは藤村自身が直面している問題を乗り越えんがための作業に他ならない。このことばかりでなく、フランス滞在中に知ったことも含め、この苦しい時期をただ苦しいとするのではなく、新たな生を得るがために絶えず思いをめぐらしていたのである。

『新生』を書いた動機を藤村は時代のデカダンな状況につるはしを打ち込んだとしている。だが、本論で明らかにしてきたように『新生』は、近親相姦というぬきさしならぬ状態から「幼い心」を得て「信」を得、世に発表し、兄から義絶されても動じない課程を描き出したものである。藤村が本来の自分のあるべき姿を見定めた上で、自らの世界を確立したのである。小説作品として世に公表することで予想される様々な反響を気にはすれど、書き続けた。この藤村の姿勢は自己の想世界が確固としているが故である。もちろんこの世界には対社会とのこと、西洋文明の受け留め方も含まれている。筆者はこれを自我統一（identite du moi）とした。藤村はこの時になって、初めて自らの位置、役割を含めた自己の生きる価値、存在価値を明確に知ったのである。雑誌「處女地」を主宰し、子供たちのために種々の童話を書いたのは

そのためである。

このような状態に至って初めて『夜明け前』の執筆、完成は可能になったのである。単に青山半蔵の生涯を追うのではなく、歴史的事実の叙述を及ぶ限り詳細に記し、外国人の見た明治維新前後の日本を描き出すことで半藏の位置のみならず、世界の中の日本と日本人、そして日本の文化を照し出したのである。さらには半藏が実世界に屈した姿を描くことによって、明治維新以後の、そして作品が発表された時点での日本の政治に対して異議申し立てを行っているのである。

筆者の主張したいことはもう理解されていることだろう。『新生』を著したことは藤村自身の世界の確立、透谷の言う想世界をさらに深めたのである。想世界に逃げ込むのではなく、社会との関わり合いを拒否するのでなく、積極的に関係していく。藤村は作家として『夜明け前』を著すことで自己の姿勢と関わり方を提示したのである。(了)

(ささき　とおる　教授)

(1991. 9. 6受理)

【註】

1）長野大学紀要第10巻第4号の本論6を参照。

2）1926年（大正15）8月発行の『文章倶楽部』に談話で発表。出典は『藤村全集第三巻』筑摩書房、昭和53年、P.444

3）1892年(明治25)、北村透谷が『厭世詩家と女性』と題して「女學雜誌」(303、305号）に掲載。『櫻の實の熟する時』では第九章に引用されている。『藤村全集第五巻』筑摩書房、昭和53、P.532

4）『藤村全集第十一巻』筑摩書房, 昭和53年、P.9(以下『夜明け前』からの引用はすべてこの書からの出典で、ページのみを記す。)

5）P.41　　6）P.31

7）P.39　　8）P.35～36

9）P.61　　10）P.63

11）P.55～56　　12）P.57

13),14）P.65　　15）P.263

16）P.272　　17）P.273～274

18）P.274～275　　19）P.275

20）P.282　　21）P.285

22),(23),(24)　P.440　　25）P.508

26）『藤村全集第十二巻』筑摩書房、昭和53年、p.337～338

27）1989年8月22日、小諸市懐古園の藤村記念館で開かれた藤村忌での講話。

28）『藤村全集第二巻』筑摩書房、昭和詩53年、P.252